

1. 愛の鐘

桑津小学校講堂前の花壇の中に鐘があります。

この鐘は、昭和 30 年（1955 年）に南鉄筋校舎上に取り付けられたものを平成になってから、ここに移したものです。

教育の根源は「愛」であるとの考えから「愛の鐘」と名づけ、当時は毎晩 10 時になるとスピーカーを通して鐘の音をながしていました。

同じ頃（昭和 33 年（1958 年））につくった校歌にも「愛の園」という副題がつけられています。

校歌「愛の園」

辻 葩 昇 作詞
野口 源次郎 作曲

一、桑津の宮の坐すところ
学びの庭に花かおる
仲よしこよし愛の園
校旗は招くはためきに
結ばうわれら 桑津校

二、明るい瞳すむところ
生いたつ力みなぎりて
誠の道を日にすすむ
希望は燃える難波津に
励もうわれら 桑津校

三、輝く雲のとぶところ
伸びゆく友ら胸はりて
あゝ縁なす国はらに
新日本のゆくさを
なおうわれら 桑津校



2. 野鳥が集まる公園

南港通りの北側の今川沿いの公園に、せせらぎがつくられています。
旧鳴戸川を埋め立てて造ったところで木が茂り、野鳥が訪れます。その西側の今川にも魚や昆虫が戻ってきたので、カワセミやアオサギも姿を見せます。
春には、毎年、鶯が、遣ってきて、最初は、たどたどしい鳴き声で、次第に上手な鳴き声になって、私たちの心を和ませてくれます。

※ 一方、こんな話があります。 近くの小学校での話ですが、校庭にある水道蛇口に、ネットに入れてぶら下げた固形レモン石鹼がよくなくなります。見ていると、鶯が飛んできてサッと啄ばんで持って行きます。どうも、黄色のレモン石鹼はおいしいようです。



3. 阿麻美許曾神社

神社は矢田村の氏神であるので、大和川の付替後にも、松原市に属さず松原市天美西 3 丁目と天美北 7 丁目の間にある 370m の道路(旧府道 26 号線)は、象の鼻のように細長く、現在も東住吉区矢田 7 丁目とされています。 矢田村氏神の参道として残されているのでしょう。 旧狭山西除天道川はこの参道の東側をジグザグに北上していたと思われますが、大和川の開削後は干拓されて、元の川は西除川として、浅香山の方向に付け替えられています。

現在の祭神は素戔鳴尊、天児屋根命、事代主命と一般に知名度の高い神様が並んでいますが、金剛寺本では 1 座とあり、主祭神名は不明です。 式内社調査報告書(河内国編)、381 頁によれば、「神名帳考證」を引用して、主祭神を「中臣の祖、大小橋命の子で阿摩比古命(アマノヒコノミコト)であろう」と推定しています。

須牟地寺や中臣須牟地神社が中臣氏に縁が深いことからわかるように、この辺りが中臣家の支配地であったこと、および神社名の許曾は尊称を意味することから、「アマノヒコを祭神とする説」は説得力があります。

一方、「河内国式神私考」によれば、舊事記に見える「彦己蘊根命(ヒコミソネノミコト)」とする説があり、「河内国造の祖で、丹比の天見丘に葬る」(春原政包日記)とあります。

この説の理由には、「物部氏が滅びた後に中臣氏がこの地を占拠し、祭神を阿摩比古命に入替えた可能性がある」ということにあるようです。 先代舊事本紀巻第十国造本紀には「神武朝期に河内国造に彦己曾保理命が任命された」と見えるので、この神社を物部系の神社に分類する人があり、そこで上記のような仮説が考えついたのではないかと考えられます。

拝殿は文久三年(1863 年)建造のもので、本殿は独特の阿麻美造で昭和 35 年(1960 年)に再建されました。樹齢 500 年の楠木の群は大阪市条例で保存樹林に指定されています。

手洗舎の東側に「行基菩薩安住之地」の石碑が建っています。

行基はその師の道昭とともに、民衆への伝道に力を入れました。しかし、「行基の天美での滞在は行基年譜に見えない」ので、この石碑の裏付けが難しいともいえます。

一方、中臣須牟地神社伝承から、天神山(矢田北小学校や城南学園用地)に行基建造の呉坂院が建造されていたと考えるなら、天神山は当神社から北々東に僅か 1.6km であるので、この神社付近も行基が関与した可能性があるとともいえます。



4. 今井戸川と大和川開削後の水害

今井戸川と東住吉区との関わりは、下高野橋と行基橋間の僅か 330m の区間に、大和川の左岸に沿って西進する川である処によります。今井戸川は、東除川と西除川の間の地域の水を集め、大和川へ流し込む重要な川です。

もとは、今川方面へ流れていたと考えられますが、大和川付替により、巨大な堤が東西に造られた結果、大和川に沿って西進しています。常盤町 3 (今井水処理場の西北隅) に、大和川に注ぐ樋門があります。

洪水のとき、流れ込む先の大和川の水位が高すぎると、排水が出来ないため、天美地区は、敗戦後に強力な揚水ポンプが敷設されて、押し寄せる水を大和川に汲み上げることが出来るまで、甚大な洪水被害がおこることもありました。

大和川付け替えの功労者、中甚兵衛は僅か 8 ヶ月の工事期間で大和川の付替えを完成し、東大阪の広大な地域の水害を解消しただけではなく、この地域の干拓工事により得た新田の払い下げにより、2 年間で幕府が支出した工費を回収する快挙を為し遂げました。



5. 今川地域振興センター

所在地 東住吉区西今川 3-6-7

電話 06-6703-0098

休館日 毎週日曜日

アクセス 近鉄今川駅下車、南へ 約 250m

1 階：ロビー、和室（老人憩いの部屋）

2 階：ロビー、洋室 1, 2, 3,

近鉄阿部野橋から三つ目の今川駅下車、進行方向（針中野方向）に近鉄の高架の左側（東側）に沿って歩き四つ目の辻を左へ、更に一つ目の辻を右へ 50m ほど行くと右側にあります。

センター内では

(1) ふれあい喫茶（何でも 150 円）、月曜日、水曜日、金曜日 10 時 00 分～15 時 00 分

(2) 親子サロン 第 2、4 月曜日 13 時 30 分～15 時 00 分

(3) 太陽の会（介護予防の事業）第 1 金曜日

(4) いきいきの会 第 1、3 金曜日 13 時 30 分～15 時 00 分

(5) ワンダーランド（小学生の総合学習）

など種々のボランティアが行われており福祉の町のボランティアの活動拠点です。

ボランティアの主な活動としては、今川連合の各町会のボランティア部長の会の中に、給食委員会（配食サービス）と友愛訪問（高齢世帯・独居老人の家訪問）があり、これら二つの活動以外に、レモンの会（家事、通院手伝い）ふれあい喫茶、親子サロン、いきいきの会、グランドゴルフ、ワンダーランド、車椅子の貸し出し、おじいちゃんの料理教室など・・・各種のボランティアのグループ活動が行われています。

これらは、愛のふれあい募金を活動資金として、運営されています。

今川ボランティア部は、昭和 54 年（1979 年）に、大阪市福祉協議会から「地域福祉活動モデル地区」の指定を受け、ボランティアスクールをはじめました。

その後、今川社会福祉協議会はボランティア活動の成果が認められて、平成 17 年（2005 年）には、緑綬褒章（団体）を受章しています。



6. 今川

平野区喜連西町と東住吉区湯里町との境界線と、長居公園通(古代の磯菰津路(シハツミチ)にほぼ該当する)の交差点に、現在の今川の水源である人工の吐水口があり、平野下水処理場で高度砂濾過法により 2 次処理された水が、約 10 トン／分の割合で注ぎ込まれています。

ここから北上して、杭全で駒川と合流し、更に今林で平野川に合流するまでの 4.5km を、一級河川の今川として大阪市建設局東南工営所が管理しています。

昭和の中頃までは、沿岸には田園地帯が多く、フナ、ナマズ、トンボ、シラサギなどの天国でしたが、住宅開発や道路建設が進み、完全な近代的市街地となりました。

しかし、その生活排水から魚類が住めなくなり、「どぶ川」と呼ばれる程に汚染が進みました。幸いにも、下水処理水が水源とされてからは、魚類が戻っており、魚に餌を与える人と、それを覚えて集まってくる魚との交流が見られます。

また、沿道の 3km におよぶ桜並木が、平等橋から杭全の水門まで延々と続き、大阪市内での桜の名所の 1 つに数えられる程になりました。

並河誠所の「摂津志」(享保 19 年:1734 年成立)によれば、「平野区西池から現在の今川吐水口を経て、平等橋から南の今川が、万葉集の巻 2-4458 番に詠まれた息長川 (No. 18) に該当する」とし、森幸安の描いた「摂津国難波古地図」や「平野郷町地図」には、現在は埋められて姿を消した、「平等橋と平野区喜連町を結ぶ『喜連川』が息長川である」と述べられております。

いずれにしても、「現在の今川が万葉集にうたわれた息長川の流れをくむものである」との説は、東住吉にとって大変喜ばしいことと考えられます。



7. 今川と鳴戸川の分岐点



狭山池を水源として北に流れていた川は、宝永元年（1704 年）の大和川付け替えにより水源を断たれ水量が乏しくなりました。

現在、今川（No. 6）には平野下水処理場の 3 次処理水が流されています。

改修前の鳴戸川（No. 60）は東から真直ぐに西に向かって流れてきて、今川にぶつかる直前に、北に方向を変え、今川と並行して流れる川で、今川とは合流していませんでした。

昭和 36 年（1961 年）の鳴戸川改修時に、この場所より上流が消滅し、今川が源流となり現在のように分岐点となりました。

また、鳴戸川には、今川 2 号橋の辺りに、東からまっすぐ流れてきて、鳴戸川に T 字型に流れ込む流れもありました。

今川と鳴戸川の分岐点にある水辺のデッキ付近では、5 月末～6 月初にコイが産卵します。春の桜も美しく、四季の楽しめるところです。

8. 今川のオニバスや、コナギ、ホテイアオイ

今川吐水口を北上し、緑橋を経て楯原橋の北側まで 630m の今川は、平野区喜連西と東住吉区湯里との境界線です。吐水口から毎分 10 トンの「砂濾過された高度処理水」が定常的に供給されてから、今川に鮒や鯉等の魚類が戻ってきましたが、この区間で有名になったオニバスが見られなくなりました。長居公園にある自然史博物館の説明では、オニバスは川水が枯渇し、川底が日光に直接曝されると川底の種が発芽し、その機会が到来するまで、土中で 50 年も生存するとのこと。従って、吐水口からの綺麗な水が絶えず供給される現状ではオニバスは発芽できない上に、栄養価が少ない水では発育しないことから、現在の今川ではオニバスが育成されない環境となっているようです。今は、吐水口から 400～500m 下った緑橋や楯原橋の辺りで、川一面にホテイアオイとコナギが繁茂しています。このように池や水田（水深が安定し、栄養価のある場所）を好む水草類が川一面に観られるのは珍しいとのこと。



今川のコナギ

9. 今川のせせらぎ

昭和 56 年(1981 年)以前の今川は、固有水源がないため降雨時以外は水枯れし、ところどころに雨水がたまって腐敗し、悪臭を放っていました。

そこで、河川環境整備事業の一環として、この川に浄化用水を導入してきれいな流れをとりもどそうと建設省・大阪府が工事を行いました。

今川の最上流部に、平野下水処理場(平野区加美 2 丁目)のきれいになった第 3 次処理水(=BOD5ppm 以下)をパイプでみちびいて、放水しています。

導入パイプは、処理場から平野川分水路に沿って新庄大和川線・敷津長吉線の下を通って今川の最上流部につないでいます(約 5.3km)。

現在は毎分約 10 トンの浄化用水が放水され、水深約 10 センチの「せせらぎ」が復活し、水質も良くなりました。

最上流部(湯里小学校東側附近)約 300m 区間には、岩や石を配置して溪流をつくり、小橋や遊歩道が設けられ、人々が楽しく散歩ができるようにされています。

芝生や木々で川岸の緑化もはかれ、区民の憩いの場として親しまれています。



10. 今川緑道

◎ 南港通りの南側緑道

平等橋を北上し、南港通と交差する川原橋までの 250m 程の間は、桜並木とユキヤナギが美しいところです。

国道 25 号線との交差手前にある水門までの北側の緑道 (2.1km) とは、南港通で分断されて、並木の様子も異なります。北側の堤では、戦前は漆並木が有名でしたが、南側の堤は松並木でした。

この堤は冬には大阪湾の風が定常的に東向きに吹いていたので、松並木を背にして、東向きに多くの子供達が凧揚げに夢中になった場所です。結構年長の人々も凧揚げに興じたもので、縦方向の年齢層との付き合いも経験したものです。

◎ 南港通りの北側緑道と、今川の漆

南側よりも 9 倍も長い桜並木です。

戦前は漆並木で有名な「漆堤」の名称がありました。

正徳 5 年 (1715 年) 付け城蓮寺村の堤奉行宛恐書 (オソレガキ) の中に、「うるし堤」の美しさを述べる文言があるので、その頃に既に漆が広く植えられていたことがわかります。

しかし、戦前の今川に残されていた漆は僅かなもので、西除川沿いにある矢田 7 丁目の阿麻美許曾神社や松原市の布忍神社境内や、駒川沿いの鷹合神社境内にも川沿いに漆の木が植えられていたことが確認できるので、漆は地場産業として、また川堤の補強策としても、今川堤に限らず、広く植えられていたことが分かります。今川の本漆は、戦中の燃料不足に困った住人達が堤の樹木を盗伐し、漆にまで手を付けたので、その全てが消滅しましたが、今も、一部では漆を植えているところもあり、昔年の紅葉を楽しませてくれます。

ただ、現在川沿いの所々に見られる樺 (ハゼ) の木は漆と似ていますが、樹液を分泌せず、造膜性や刺激性がなく、異なった性質の樹木です。



桑津今川堤碑